



生命の源

# 一步先のあなたへ

永田 和宏

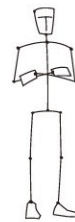


## 3 何も知らない私から

私の専門は「細胞生物学」である。生命の基本単位である細胞という空間のなかで、どのような生命活動が営まれているのかを研究する、生命科学のなかでももっとも根幹をなす学問分野。などと言つと、いかにも難しそうなので、最初は数学で驚いてもらうことにしている。

細胞が一個一個集まって個体を作っていることは誰でも知っている。一人の人間のなかにある細胞の個数がほぼ60兆個というのも常識になりつつあるだろうか。細胞の大きさは、10ミクロン。もちろん顕微鏡でなければ見ることはできない。

ともないようで、正解はほぼ皆無である。60兆という数を知識としては知っているのだが、実感としては経験していない。あるいは知識を自分の感性のなかに組み入れようという意識が希薄なのだと言えようか。



単純な計算である。掛け算をしてみれば、60万キという答えは小学生レベルの算数で簡単に求まる。この数もすごい数だが、それをどう実感するかは、勉強への興味と感心に直結するだろう。60万キというのは、地球を15周するだけの長さである。

私たちは一個の卵子と一個の精子が受精した、たった一個の受精卵から出発した。0・1から0・2ほどの存在でしかなかった、たった一個の受精卵が、わずか20年足らずのうちに、地球を15周もできるだけの長さの細胞を作ってきた。誰の助けも借りずに、自分だけの力で、これだけの細胞を作ってきたのである。

これに感動しない人はいるのだろうか。ちっぽけな存在でしかないと感じていた自分が、紛れもなく自分だけの力で地球15周分の細胞を作ってきた。生まれてから毎日歩き続けたとしても、とてもこれだけの距離には到達しない。自分という存在を褒めてやりたい気分にもなるだろう。こんな小さな感動があれば、興味と関心はおのずから学問へ向かうものである。いつは、学問をするという事は、「自分が何も知らない存在である」ということを知る「こと」である。私って、そんな

なですごい存在だったのか、と感動するということは、そんなことも知らない自分であったということを知り、改めて知ったことからくる感動なのだ。初めから何でも知っていたら感動などは生まれない。誰でも学問をする前には知らないのはあたりまえじゃないかと早合点しないでほしい。これまで知らなかった事実を知ることではなく、「知らない存在としての自分を知る」ことが学問のはじめなのだと思うのである。私は何も知らない存在なのだと思つてくこと。学問はそこから出発する。

自分の知っていることは世界のほんの一部にしか過ぎないのだと自覚する、それはすなわち自分という存在の相対化ということである。それを自覚しないあいだは、自分が絶対だと思いがちである。自分だけしか見えていない。世界は自分のために回っているような錯覚を持つ。



自分は(まだ)何も知らない存在なのだと思つてくこと、相手と自分との関係も見えてくるだろうし、世界のなかでの自分が存在することの意味も考えることになるだろう。私は(まだ)何も知らないと思つてくことは、いまから世界を見ることができるといふことでもある。そうして見ひらいた目に見えるものは、たとえばこんなちっぽけな私の身体の内には、地球15周分の細胞が詰まっているのだという、自分という存在を尊敬の思いともに見ることができるといふことである。

地球15周分の細胞を作った自分が  
世界の一部しか知らぬという自覚  
この小さな感動から学問は始まる

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人